



岩波文庫

6234—6236

好色一代女

井原西鶴作
横山重校訂

岩波書店

昭和三五年八月五日 第一刷発行 ©
昭和四二年九月二〇日 第七刷発行

好色一代女

定価★★★

校訂者

横よこ

山やま

重しげる

発行者

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
白井倉之助

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋二丁目三番地

株式会社

岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・桂川製本

岩波文庫

6234—6236

好色一代女

井原西鶴作
横山重校訂



岩波书店

凡 例

一、小宮豊隆氏を委員長とする、岩波文庫西鶴本校訂委員會の指定により、本書の校訂はわたくしが擔當した。

一、本書の底本として左記の二本を使用した。

○天理圖書館藏本。表紙は青色無地で、製本寸法は26.2×18糎あり、赤木文庫本より豎の寸法が六糎長い。又、題簽の右側に、白地單郭の脇題簽(7.9×8.9)を貼つてあり、これには各々、その卷の内容大意を細字で散らし書きにしてある。その文字は西鶴の自筆といふ。世に特製本と謂つてゐる。

○赤木文庫藏本。表紙は澁色無地で、製本寸法は25.6×18糎、原題簽は揃つてゐるが、脇題簽はない。

3 凡 例
一、書名は、題簽に「繪入好色一代女」とあり、内題に「好色こやしよく一代女」とあり、これで決定してゐる。本書には改題本はない。

一、原本の本文は、特に讀みにくいといふ事はないが、その翻刻にあつては、できるだけ易い本文とするやうに努めた。その概要は以下に記す通りである。本書には、原本そのままの複製本も出てをり、又、原本に準じる翻刻本も、中央公論の定本、岩波の大系本、朝日の全書本など多くあるから、それらを参考せられたい。

一、本書で別行を多くつくつた。文章が切れてゐない所まで別行にした所がある。これは、文意を分り易くし、行間をサツパリとさせる爲である。原本は、一章の中に、別行にした所は、一個所もない。

一、原本の句讀點は、黒丸點・と白丸點。とを併用してゐるが、本書は白丸點。に統一し、その他に、更により多く、私點、を加へて出した。その方が讀みよいと考へたからである。が、これは校訂者の私意によるものであつて、特に根據があるわけではないから、私點、に拘泥せられぬやう希望する。

一、漢字の處置について

1 行草體の漢字は通行の文字に改めた。

2 異體の文字や、本書に特有の見なれない文字があるが、讀めるものは特に改めず、卷末に

一覽表を出した。が、詳細には、複製本によらねたい。

3 原本に略字體で出しているものは略字體の活字を用いた。尙、弌、余、声、仏、礼、乱、独、榮、覺、帰、灯、麦、凌、条、塩、恋、交、国、昼、竜、籠、滝、点、蓋、鹵、龜、豊、隙、隱、数、竈、勸、覩、弥、繼、鑄、断、积、献、その他である。が、原本が正字體の文字を出してある時は、やはり正字體の活字を使用した。

4 原本には、稀に誤字らしいもの、又は見なれない文字がある。今、卷一ノ一のものだけを舉げて見る。

① 縹たどり行ゆかれ(卷四ノ三ニハ「縹たより行く」ト振り假名アリ) ② 蒨あざみ(蒨あざみ)など

③ 藹らうた蘭らうたけて(藹らうた蘭らうたけて) ④ 瀑しゃれいた板しゃれいた(曝しゃれいた板しゃれいた)

⑤ 睨のそき(卷一ノ三ニハ目偏ニ穴字アリ)は睨のそき ⑥ 繩いとすぢ(繩いとすぢ筋いとすぢ)ならして

この中で、①の「縹たどり」は、本文にそのまま残したが、②以下は、本文に、蒨あざみ、藹らうた蘭らうたけて、曝しゃれいた板しゃれいた、睨のそき、繩いとすぢ筋いとすぢと、改めて出し、その改めた文字に黒丸をつけた。が、原本の文字はすべて一覽表に出した。又、⑤⑥のものは特に脚注にも出した。

5 又、原本には、物毎ものごと(物事)とか、女在じよさい(如在)とか、女鉢によはち(如鉢如鉢マタ鏡鏡鉢)とか、住寺ぢうじ(住持)

とか、しんたい身体(身代)とか、まこと眞言(眞實)とか、く扱(汲)むとか、にしがは西輪(西側)とか、あま瘤(痣)とかい

やうな用字がある。これらは當時の慣用の宛字として、本文に残した。

6 しかし、當時の一般の慣用の文字でも、うちわ團扇とし、もめん櫛は木綿とし、ともしび燈は燈火とし、どじやう鱧は泥鰌と、それぞれ二字に作つて、本文に出した。又、てうちん灯挑(三ヶ所)や、ほくら瘕子(二ヶ所)などは、當時の慣用か否かを知らないが、てうちん挑灯、ほくら黒子と改めて出した。この方が読み易いからである。が、原本の文字は、脚注にも出し、一覽表にも出した。

一、假名文字の處置について

1 假名文字はすべて通行の文字に改めた。

2 誤刻、また、衍字と思はれるもので改めたものもあり、本のマ、に残したものもある。一ノ三「恋をを願ひし」は下のを字をとり、三ノ三「けふの慰みあさなくりて」は「あさく^なりて」と訂して脚注にとつた。又、六ノ三「^{ながひらがみ(マ)、(は)ひろ(マ)、(か)}長平紙を幅廣を掛け」は本のマ、とした。

一、振り假名について

1 原本の振り假名で、さして必要でないと思はれるものは省略した。

2 それに反し、原本に振り假名はないが、振り假名を欲しいと思はれる所がある。それは括

弧の中へ入れて出した。今、卷一ノ一から四例を出しておく。

防風、薊など、萌へ出るを―萌へ出づるを(一九頁二行)

眼は、入がたの、月影かすかに―入りがたの(一九頁九行)

わけもなく、取乱して―取り乱して(二三頁四行)

諸神、書込みし所は―書き込みし所は(二三頁一行)

右の四例とも、後に記す5の條件に準じて、加へた振り假名を、更に本文に組み入れ、その文字には黒丸をつけた。

3 原本の振り假名に誤刻(又は誤り)と思はれるものがある。これは訂正して、改めた文字には黒丸をつけ、脚注にも取つた。

邪氣乱つにつて、縹り行かれし道は―邪氣乱つにつて(一九頁一行)

目安書くやうなる、様書きて―様書きて(一〇六頁二二行)

4 原本の振り假名に、本文の中へ入れた方がよいと思はれる文字がある。これらは本文の中へ移した。が、これらは、符牒も入れず、注記もしなかつた。

物越(物腰)程、可愛はなし―可愛らしきはなし(三二頁四行)

誰才覚ぞと、下女、白眼むなど―誰が才覚ぞと(五九頁一〇行)
 荻若成りとも、買ふて吞れと―吞みやれと(一三七頁三行)

5 本書においては、活用語および、これを含む語は、その語尾を振り假名から移して、本文の中へ組み入れたものがある。中には、活用しない部分まで、振り假名から本文へ移したのももある。より読み易くするためである。これらはすべて、符牒も入れず、注記することもない。

美女は、命を断斧と、古人―断つ斧と
 くり出しの浮歩―くり出しの浮け歩み
 客からの…奢物なり―奢る物なり
 小尻とがめ、出来達にして―出来し達
 少は人を忍ぶ也―少しは人を忍ぶ也

心の花散、ゆふべの焼木と―花散り
 宿や入の飛足―宿や入りの飛び足
 大じんの手前、よしなに申なし―申しなし
 日の暮を待兼―日の暮るゝを待ち兼ね
 情目づかひ迎―情け目づかひ迎

一、原本は各巻の巻頭に目録を出してある。これは本巻の各四章の要領を出したものである。今、この目録と、本巻の中見出しに番號を入れて、對照の便とした。

一、原本の丁數は、各丁の終りに、その表丁の場合のみ、脚注として、一オ、二オと記した。

一、挿繪は、原本の場合、各章の途中か終りに、多く見開きのものとして出してあるが、今はその章の適當の個所に入れた。原畫の作者は、京都の吉田半兵衛である。西鶴は、一代男、二代男から、西鶴諸國ばなし、近代艶隠者までは、自らその挿繪を描いたが、貞享三年の仲春上旬の「好色五人女」から、挿繪は吉田半兵衛に託した。

一、脚注は、地名・人名の他に、特殊な條項について略記した。これは、先書のものも参考したが、主として、小野晉氏、前田金五郎氏の調査に従つた。本書の本文は、読み易く作るのが主眼であつたが、脚注また補注は、正確を旨とした。一代女の注記としては最先端に立つものと信じる。ここに記して、兩氏に感謝の意を表す。

一、本文作製と用字一覽表は太田武夫氏の助力を得た。又、卷末の一代女解説は、小野晉氏の校閲を経て、氏の所説を多く採り入れた。これ又感謝の意を表す。

一、卷頭に出した寫眞は、天理圖書館の藏本と赤木文庫の藏本の寫眞である。いづれも元表紙である。藏本の披見に便利を與へられたる天理圖書館に感謝する。

横 山 重しるす

目 次

凡 例 三

好色一代女

卷 一 一五

卷 二 五

卷 三 八五

卷 四 一九

卷 五 一五一

卷 六 一八一

補 注 二二五

解 說 二四三

用字一覽表 二九五

繪入
好色一代女

卷一

姿のかくれ里にたづね入

世に有程の女物語 きけば聞程

都とは櫻咲ひがし山の事

何國にも女はあれど

こんなものは

千人の中にも

なひといふは 捨金貳百兩

嶋原見た目に

外の紅葉も 月も 地女も

